

# 中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究

## —「祭香」セレクションの検証—

岡田 知也

(音楽教育講座)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

### A Study on Activity of Small Bands in Junior High School : Inspection of "San-ka" Selection

Tomoya Okada

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**要 旨** 少子化の影響は、学校教育実践の場において様々な影響を及ぼしている。その一例が児童・生徒数の減少に起因した、課外活動に所属する児童・生徒数の減少である。中学校における吹奏楽部の部員数も例外ではなく、多くの吹奏楽部で部員が減少していった。部員数の減少という事象を受け、吹奏楽連盟各支部は主催するコンクールにおいて中学校部門、高等学校部門にそれぞれ小編成の部を新たに設けた。しかし当初は選曲や編曲、演奏表現において不自然な演奏が多く見てとれた。このことは同時に小編成に特化した指導法や演奏曲が未開発であったということの意味する。本研究は中学校における小編成の吹奏楽部において演奏される楽曲に注目して、小編成の吹奏楽の特性を生かした演奏曲を編曲により、あるいは新たに開発し、検証するものである。

**キーワード** 中学校, 課外活動, 吹奏楽, 編曲, 小編成

#### 1. はじめに

我が国における少子化傾向は依然として続いている。2004（平成16）年には合計特殊出生率が1.29となり過去最低を更新した。（厚生労働省, 2005）

2006（平成18）年には1.32, 2007（平成19）年には1.34と2年連続で上昇したものの（厚生労働省大臣官房統計情報部, 2008）、少子化の傾向が改善される数字には遠く及ばない。このような少子化の影響は、学校教育実践の場において様々な影響を及ぼしているといえる。その一例が児童・生徒数の減少に起因した、課外活動に所属する児童・生徒数の減少である。

中学校における吹奏楽部の部員数も例外ではない。もちろん生徒数の減少だけをその理由にするのは些か性急といえようが、本研究を開始した2001（平成13）年以降も、研究対象とした中学校2校における部員数の増減に大きな変化は見られず、一貫して30名前後で推移している。

以上に述べたような部員数の減少という事象を受け、関西吹奏楽連盟は1991（平成3）年度より、中国吹奏楽連盟は2000（平成12）年度より、主催する吹奏楽コンクールにおいて、中学校部門、高等学校部門にそれぞれ小編成の部を新たに設けた。両部門は従来50名を編成の定員としており、少人数による編成ではコンクール

という場において不利は免れなかったのである。少人数であるにもかかわらず素晴らしい音楽を聴かせてくれる団体もあったが、概して人数の不利を補うため、あるいは大編成の団体と互角に競うため、選曲や編曲、演奏表現において相当の無理をしているように見てとれた。学校教育の一環でありながら、一方、音楽を審査されるコンクールのまさに弊害であったといえよう。このような状況の中、30名を定員とする小編成の部が設けられたのである。

これらの事象を受け、学校吹奏楽において小編成で活動する団体に、適切な演奏楽曲を開発し、またその指導法や運営等について提言を試みることを目的として本研究を継続してきた。

## 2. 研究の経過及び方法

本研究のこれまでの経過は以下の通りである。

(1) 筆者(2001)は、小編成での演奏に適している作品について、次のような提言1)～3)を行うと同時に、バッハ(Bach, J.S. 1685-1750)の無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番イ短調BWV.1003の編曲を試みることににより提言内容の可能性を示唆した。<sup>(注1)</sup>

- 1) ピアノ、ヴァイオリン、オルガン等、器楽独奏のための作品
- 2) 弦楽四重奏、ピアノ連弾等、同族楽器のアンサンブルによる作品
- 3) ヴィラ＝ロボス(Villa-Lobos, Heitor 1887-1959)やピアソラ(Piazzolla, Astor 1921-1992)の作品等、一般的な管弦楽とは楽器編成が異なるもの。

等を原曲として、

ア. 吹奏楽が備えている特性、例えばサクソフォンやユーフォニウム等、通常編成の管弦楽には用いられていない楽器の音色や多彩な打楽器群を活用する。

イ. 原曲を忠実に再現しようとするのではなく、吹奏楽のための作品として、新たな役割を担うものとする。

等の指針に基づき編曲されたものであること

が望ましいとの提言であった。

(2) 上述した提言1)～3)に基づき、小編成で演奏するのにふさわしい楽曲として、平成13年度より毎年1作品ずつ、小編成の吹奏楽部活動に特化した楽曲を編曲により開発した。さらには、その演奏を『研究報告芸術作品集Ⅱ』において発表を行うとともに、各年度の吹奏楽コンクールの自由曲としてこれらの編曲作品に取り組むことを、2校の中学校の吹奏楽部に依頼した。

開発した編曲作品とその選択理由は以下の通りである。

〈平成13年度〉

ヴィラ＝ロボス〈ブラジル風バッハ第2番〉より〈アリア〉、〈トッカータ〉<sup>(注2)</sup>

作曲者が指定した本楽曲の編成は、通常の木管楽器各1に加え、テナー及びバリトンサクソフォン各1、ホルン2、トロンボーン1、弦楽5部、ピアノ、チェレスタ、打楽器群である。特に打楽器群には、Chocalhos, Ganzá, Recreco等の民族的な打楽器が指定されている。管弦楽の通常の編成と比較するとかなり小規模であり、さらには通常は管弦楽では用いられず、吹奏楽において活用されるサクソフォンが重要な役割を担っている。以上のことから、本楽曲は先述の3)に該当し、上記ア、イの2つの指針を満たすものであるとの考えに基づき編曲を行った。

〈平成14年度〉

ドヴォルジャーク(Dvořák, Antonín)〈スラヴ舞曲集第2集〉より〈op.72-3〉、〈op.72-5〉

スラヴ舞曲集は第1集(op.46)8曲、第2集(op.72)8曲の16曲で構成されている。この作品はもともとピアノ連弾曲として作曲され、後に作曲者自身によりオーケストレーションされた。管弦楽版の編成は一般的な2管編成であるが、筆者はこの作品を本来のピアノ連弾曲として捉え、先述の2)に該当すると考え、特に指針イを振り所として編曲を行った。また第2集(op.72)8曲のうち第3番と第5番を選んだ理由は、打楽器の活用という要素におい

てこの2曲が、指針アを最も満たすことができると考えたからである。

〈平成15年度〉

サン＝サーンス (Saint-Saëns, Camille) 〈動物の謝肉祭〉より 〈化石〉, 〈白鳥〉, 〈終曲〉

作曲者が指定した本楽曲の編成は、弦楽5重奏、ピアノ2台、チェレスタ、木琴である。管楽器は曲により使用される楽器が異なる。例えば〈化石〉ではクラリネット1、〈白鳥〉では管楽器は用いられず、2台のピアノとチェロの3名のみで演奏される。〈終曲〉ではピッコロ1、クラリネット1が用いられるのみである。この作品も管弦楽の通常の編成と比較するとかなり小規模であり、さらには通常管弦楽では用いられないピアノが活用されている。以上のことから、本楽曲は先述の1)及び3)に該当し、上記ア、イの2つの指針を満たすものであると考えられる。

(3) 活動実践における上記の3編曲作品の成果について、吹奏楽コンクールの自由曲としてこれら3曲に取り組んだ中学校2校の吹奏楽部及び顧問教員を調査対象としてアンケート調査により検証を行った。(岡田・井上, 2006)

(4) 上記(3)で述べた検証結果を踏まえ、小編成の吹奏楽の特性を生かした楽曲“「祭香」セレクション”を発表した。(岡田, 2007) (注3)

本小論は上記(4)で述べた“「祭香」セレクション”について、アンケートによる調査及びその分析・考察により検証したものである。

### 3. “「祭香」セレクション”について

#### (1) 概要

“「祭香」セレクション”は、筆者により1994(平成6)年に作曲された“女声合唱と吹奏楽のための「祭香 - 南部の四季に寄せて - ”を大幅に加筆し、小編成の吹奏楽での演奏を想定し、さらには演奏時間において吹奏楽コンクールにおける自由曲としての演奏を考慮し、新た

に再構成したものである。

“女声合唱と吹奏楽のための「祭香 - 南部の四季に寄せて - ”は、同年、和歌山市において開催された「世界リゾート博覧会」における演奏のため、和歌山県南部町(現・みなべ町)の委嘱により作曲された作品である。

作品は2部で構成され、演奏時間は約20分を要する。さらに第1部は「冬」と「春」、第2部は「夏」と「秋」の副題を持つ部分に分かれるが、「冬」と「春」、「夏」と「秋」は各々切れ目なく演奏される。作品の性格としては、南部町の四季の風景を詠んだ森脇崇(和歌山県立南紀高等学校教諭)によるテキストに基づいて作曲された一種のカンタータであるといえる。そのため原曲の演奏に際しては、演奏者として、吹奏楽50名程度、金管バンド30名程度及び女声合唱30名程度の計110名程度を要する。これは吹奏楽曲の演奏においては比較的大きな編成といえる。

(2) 課題の設定から“「祭香」セレクション”の成立へ

前述したアンケート調査(岡田・井上, 2006)から得られた考察のうち「(前略)演奏において、表現の側面も重要な要素であることはいうまでもない。ただ取り組むかどうか検討している楽曲が、表現の側面において、指導者や中学生にとって難しいか易しいかの判断の手がかりをわかりやすく提供する必要があると感じた」、 「(前略)原曲の印象が強く支配する楽曲については、吹奏楽で新たな表現を構築するのは難しいものとして指導者に受け取られることが懸念される」という2点から、「提言している選曲の指針により新たに編曲作品を開発する。さらには編曲作品のみならず、実践のデータに基づき自作の楽曲も開発する」ことを本研究における今後の課題として設定した。この課題の後半部分、すなわち「実践のデータに基づき自作の楽曲も開発する」ことへの取り組みとして、筆者は小編成用の吹奏楽曲である“「祭香」セレクション”を作曲したのである。

次に“「祭香」セレクション”の楽器編成に

ついて述べることにする。筆者(2006)は、小編成について

「先行研究における編成例を視野に入れつつ、本研究においては小編成を次のように捉えていくことにする。すなわち『原則として30名による編成』が本研究における小編成の定義である。しかし編曲する際は、実践する学校の状況に応じて、可能な限り27~29名の編成でも演奏ができるように配慮していきたい」との提言を行っている。上述の30名編成の内訳は次の通りである。

〈30名編成〉

Fl 2 (Pic含む), Ob 1, Fg 1, EbCl 1, BbCl 6, BCl 1, Asx 2, Tsx 1, Bsx 1 の木管楽器計16名。

Tp 3, Hr 2, Tb 2, Euph 1, Tub 1, SB 1, Perc 4 の金管楽器と打楽器計14名。合計は30名である。

ただし上記の30名による楽器編成を小編成の原則的な定義と捉え、編曲等を行う際はこれに沿うこととしているが、活動実践の場における様々な編成の実態に対応することも必要であることを念頭に置いて、以下の27名の編成でも演奏が可能となるよう極力配慮することを提言に含めている。

〈27名編成〉

Fl 2 (Pic含む), Ob 1, Fg 1, BbCl 6, BCl 1, Asx 1, Tsx 1, Bsx 1 の木管楽器計14名。

Tp 2, Hr 2, Tb 2, Euph 1, Tub 1, SB 1, Perc 4 の金管楽器と打楽器計13名、合計27名。

これらの楽器編成に関するこれまでの研究成果を踏まえた上で、「[祭香] セレクション」においては30名の編成で作曲することとした。

その理由としては、サウンドの厚みや色彩感を表現するためにEbクラリネットと四声体を構成することができる4名のサクソフォン群及び三和音を同一パートで担当することができる3名のトランペット群が不可欠であると考えられたことが挙げられる。

小編成は人数が少ないだけであって、その機能面においてはむしろアドバンテージとなる可能性もあるとの考えのもと、小編成において

も、トゥッティのサウンドや、個々の楽器の音色の色彩感の変化を重視したため「[祭香] セレクション」においては30名編成を選択した。

本作品は、上述したような経緯で作曲された。筆者がかねてより提言している30名編成での演奏を想定し音色のバランスやブレンドを考慮して作曲していることは言うまでもない。具体的には以下のような点について考慮した。なお、これら考慮した点についてはその必要性について明確なデータの裏付けが存在するわけではなく、経験的に得られた知見に基づいたものである。

- 1) 各楽器が使用する音域について、基本的には中学生にとって無理のない音域を使用する。しかし表現上必要な箇所には、その限りではない。ただし多用しないようにする。
- 2) ハーモニーを構成する各音を何れかの楽器が担当する際、当該の音域においてコントロールが難しい楽器には第3音、第7音等、ピッチやバランスに繊細な音を要求される構成音を担当させることを可能な限り避けるようにする。
- 3) 内声において三声体の和声を構築する際、2本のホルンに、比較的サウンドがブレンドすると思われるファゴットを加える。四声体の場合はさらにバリトンサクソフォンを加える。
- 4) 楽曲の各部分において、サウンドが単調にならないようオーケストレーションを工夫する。吹奏楽曲においては管弦楽曲とは違い弦楽器群が存在しないため、クラリネット群、サクソフォン群をサウンドの核として多用してしまいがちである。その結果として楽曲がサウンドの変化に乏しい、単調なものになる。
- 5) オーボエを効果的に使い、吹奏楽における音色を、色彩感豊かなものとする。
- 6) 吹奏楽におけるサウンドを色彩感豊かなものとするために、打楽器群を活用する。

次に作品の内容について解説する。

序奏部はセレクションのために新たに作曲された部分である。D dur, 4分の4拍子, モデラートで冒頭トランペット, ホルン, オーボエとEbクラリネットが, Fis, E, Fis, Dの4音からなる第1のモチーフとA, H, Fisの3音からなる第2のモチーフを組み合わせせたテーマをユニゾンで提示する。

序奏部はその後d・mollに向かい, 原曲「冬」の後半部分, 女声合唱が加わる部分を吹奏楽のみで演奏する形をとりB<sup>b</sup> durに一端終止する。続いてg・moll, 4分の4拍子, ポコ・ピウ・モツ・エ・カランドの「夏」の後半部分となる。原曲では「夏」は第2部の開始部分にあたり, 第2のモチーフによるファンファーレ風な導入部が置かれているが, “「祭香」セレクション”では全体を切れ目なく演奏するためカットし, 「冬」から「夏」の後半に移行するようにした。また原曲では間にF durの「春」の部分があり, d・moll-F durで第1部が終了し, あらためてg・mollの「夏」という調性関係になっていた。しかし本楽曲では切れ目なく「冬」から「夏」, すなわちd・mollからg・mollに移行するために, 直接, 近親転調により移行するのではなく, 新たにB<sup>b</sup> durの3小節間を加えている。これは原曲では各部分が明確に独立していたのとは対照的に, “「祭香」セレクション”においては, 単なるメドレー風な楽曲ではなく, 統一のとれたシームレスな構成を意図したからである。さて「夏」の部分は前半のクライマックスを形成し, B<sup>b</sup> durの主和音に終止する。強いて言えば, ここまでが前半部である。

後半部は原曲「秋」の大部分を用いている。F dur, 4分の4拍子, アレグロ・ジョコソで第1のモチーフをユニゾンで吹奏する4小節の短い導入部を経て, やはり第1のモチーフによる「秋」のテーマが表れる。「秋」の中間部, 締太鼓や篠笛を模倣した日本的な部分は秋の収穫の祭りをイメージしたものであるが, これは特定の芸能を引用したものではない。この部分では, 原曲を委嘱された和歌山県南部町(現・みなべ町)周辺地域で受け継がれている三つの異なる地元の芸能を対位的に組み合わせる技

法を用いている。

その後, ダル・セーニヨまでは, 新たに作曲した部分である。原曲「春」のモチーフ(第2のモチーフを手がかりとしている)の断片を用い, 経過部として構成している。ダル・セーニヨ後, 9小節でコーダに入る。グランディオソで「春」のテーマを歌い上げ, 快活なヴィーヴォで終結する。演奏時間は約8分30秒である。これは課題曲とあわせて12分間という演奏時間制限がある吹奏楽コンクールの自由曲として演奏することを考慮した結果である。

#### 4. アンケート調査の集計結果及び分析

##### (1) アンケート調査の概要

・調査対象者及び調査方法: 吹奏楽コンクールの自由曲として“「祭香」セレクション”に取り組んだ中学校2校の吹奏楽部及び顧問教員を調査対象者とする。文中では2校をA中学校, B中学校と表記する。

A中学校は関西支部に所属する公立中学校で各学年2～3学級の小規模校である。B中学校は四国支部に所属する国立大学(当時, 現・国立大学法人)教育学部の附属中学校で各学年3学級の小規模校である。

アンケート調査は調査対象者に電子メールの添付ファイルで調査用紙を送信し, 記名回答を依頼した。また必要に応じて直接面接法による調査も行った。

・調査時期: 平成17年10月

・調査内容: 設問は5段階尺度による選択肢によるものと記述式によるものがある。内容は①選曲について, ②編曲について, ③選曲・編曲について顧問教員の自由記述の3部分により構成されている。

・凡例: アンケート調査の内容を取り扱う際, 本小論における凡例は以下の通りとする。

アンケート調査の質問事項を文中に引用する際は斜体+強調文字で表記する。

アンケート調査の回答選択肢を文中に引用する際は「 」で, 回答の具体的記述内容を文中に引用する際は『 』で, さらに曲名は〈 〉で

くくることとする。

(2) アンケート調査の質問内容

アンケート調査の質問項目は次の通りである。

1. 選曲について

(1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか

- a) 技術 (全体及び各パートについて)
- b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって)

(2) この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか

- a) 楽器編成
- b) 小編成で演奏する楽曲として

(3) 選曲について自由にお書き下さい。

2. 編曲について

(1) 演奏, 指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

(2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

(3) 編曲について自由にお書き下さい。

3. その他 お気付きの点があれば自由にお書き下さい

(2) 集計結果及び分析

〔表1〕は 1. 選曲について (1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか a) 技術 (全体及び各パートについて) の回答及び集計結果である。また〔表2〕は回答分布を集計したものである。

1. 選曲について

(1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか

- a) 技術 (全体及び各パートについて) 5 : 難しい 4 : やや難しい 3 : 適当 2 : やや易しい 1 : 易しい

〔表1〕

	全体	Fl	Ob	Fg	Cl	Sax
A中学校	3	3	3	2	3	3
B中学校	3	3	3	3	3	3

Tp	Hr	Tb	Eup	Tub	S.B	Per
3	3	2	3	2	3	4
4	3	3	3	4	3	4

〔表2〕 回答の分布集計

	5	4	3	2	1
A中学校	0	1	9	3	0
B中学校	0	3	10	0	0

〔表1〕, 〔表2〕をみると, 全体を通して「3 : 適当」との回答が最も多く, いずれの曲も, 技術面で中学生が取り組むのにふさわしい曲であるという回答が寄せられている。

A中学校とB中学校を比較して, 同じ項目の回答で2ポイント以上の差があったのはチューバである。また各パートの回答においては, A中学校は「2 : やや易しい」が圧倒的に多く, 「4 : やや難しい」が1パートに対して, B中学校ではトランペット, チューバ, 打楽器の3パートについて「4 : やや難しい」の回答であった。

これは第一に, 吹奏楽においてチューバは低音サウンド, トランペットは金管楽器サウンドの要となるパートである。また打楽器の用法に関しては, 「祭香」セレクションにおいては, 先述した編曲に関する提言ア「吹奏楽が備えている特性, 例えばサキソフォンやユーフォニウム等, 通常編成の管弦楽には用いられていない楽器の音色や多彩な打楽器群を活用する」に基づき, とりわけ打楽器を効果的に活用している。小編成による演奏は大編成による演奏と比較して, 生徒一人ひとりの音や表現が合奏音に表れやすく, 演奏において独奏等を担当する生徒の力量の差が指導者の印象, ひいては回答に反映された結果であると考えられる。

第二に, B中学校がこの楽曲に取り組んだ年は, 金管楽器の各パートは1年生に頼らざるを得ない状況であった。そのため同じ楽曲ではあるが, 該当パートを担当する生徒の楽器経験年

数による力量の差が、回答結果に反映されたものと考えられる。

〔表3〕は 1. 選曲について (1) この音楽が技術面や表現・理解面において中学生バンドに適していると思われませんか b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって) の回答及び集計結果である。

〔表3〕

b) 表現, 理解 (中学生, 指導者にとって) 5: 難しい 4: やや難しい 3: 適当 2: やや易しい 1: 易しい

		メロディ	ハーモニー	リズム	音楽の構成
A中学校	中学生	3	4	4	3
	指導者	3	4	3	3
B中学校	中学生	3	4	4	3
	指導者	3	4	4	3

〔表3〕を見ると、メロディと音楽の構成は、両校とも中学生、指導者双方にとって「3: 適当」との回答であった。しかしハーモニーやリズムはA中学校の指導者を除き「4: やや難しい」という回答が見られた。表現や理解の上でも中学生に適した楽曲であると言えるであろう。

「祭香」セレクションにおけるハーモニーの要素に関しては、繊細な響きの「ゆらぎ」を表現するため機能と声の理論に縛られない自由な和声の手法を用いており、「4: やや難しい」という回答が見られたのはこのことと関連すると考えられる。例えば6th, 7th, 9th等、付加音を用いた和音や、非和声音の処理に現代的な手法がうかがえる。このようなハーモニーを心地よく響かせるには、和音の構成音のバランスやピッチに対する鋭敏な「耳」の育成と、時間をかけた合奏体としての基礎的なトレーニングが不可欠である。これらのことがハーモニーに関して「4: やや難しい」との回答に結び付いたものと思われる。以前の編曲作品では、〈ブラジル風バッハ第2番〉の〈アリア〉において、同様の傾向が見られた。

リズムの要素に関しては、後半「秋」の部分

にあるヘミオラ風リズムの表現が「4: やや難しい」という回答に結び付いた直接の要因であろう。「祭香」セレクションは、これ以外にも変拍子として記譜されていないものの、アクセント位置の移動により、変拍子風に表現すべき箇所がいくつかある。やはり〈ブラジル風バッハ第2番〉の〈トッカータ〉では、冒頭、機関車が動き始める描写において用いられている変拍子風にアクセントを移動させたリズムが「5: 難しい」との回答に結びついていた。

難易度の受け取り方の差異には、前述のような生徒一人ひとりの音が合奏音に表れやすいという小編成の特性や、日常の基礎的な練習への取り組み、演奏楽曲のジャンル等による得意、不得意が関係するものと考えられるが、音楽における諸要素の中で意外にもリズムの要素における表現に関して、その他の要素と比較して苦手意識があるように感じられた。

〔表4〕は (2) この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか a) 楽器編成の回答及び集計結果, 〔表5〕は b) 小編成で演奏する楽曲としての回答及び集計結果である。〔表6〕は (3) 選曲について自由にお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を列記したものである。

〔表4〕

(2) この音楽が小編成バンドに適していると思われませんか

a) 楽器編成

5: 適している 4: やや適している 3: どちらとも言えない 2: やや適していない 1: 適していない

A中学校	5
B中学校	5

〔表5〕

b) 小編成で演奏する楽曲として

5: 適している 4: やや適している 3: どちらとも言えない 2: やや適していない 1: 適していない

A中学校	4
B中学校	5

〔表6〕

(3) 選曲について自由にお書き下さい。

A中学校	演奏時間が短い楽曲であるにもかかわらず、変化に富んだ曲であり、演奏効果が高い
B中学校	微妙に変化していくハーモニーが美しい。 技術的には難しくないが、演奏はそれを感じさせない格調のある仕上がりとなる。

〔表4〕及び〔表5〕を見ると、A中学校が小編成で演奏する楽曲として「4: やや適している」と回答があった以外は、「5: 適している」との回答であった。〔表6〕の記述と併せて、これらのことから「祭香」セレクションは、小編成での演奏に適した楽曲であると評価されているといえるであろう。また「3. 小編成の定義と具体的編成例」の「(4) 本研究における小編成の定義」において提言を行った、楽器編成に関しても適切であると評価されているといえよう。A中学校が小編成で演奏する楽曲として「4: やや適している」と回答したのは、後の自由記述に述べられている『使用打楽器が多かった。小編成としては厳しい(楽器を運搬する生徒が確保しにくい)』がその理由であろう。本楽曲においては、吹奏楽におけるサウンドを色彩感豊かなものとするために、打楽器群を活用することを考慮していたわけであるが、楽器の運搬という運営面に関わる側面においては問題が生じる可能性があることがわかった。

〔表7〕は2. 編曲について(1) 演奏、指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を、

〔表8〕は(2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。に寄せられた自由記述回答を、〔表9〕は(3) 編曲について自由にお書き下さい。に寄せられた自由記述回答をそれぞれ列記したものである。

〔表7〕

2. 編曲について

(1) 演奏、指導上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

A中学校	音が合いにくい(相性の悪い楽器の組み合わせ)箇所、バランスを取りにくい箇所、技術的に困難な箇所がある。 前半部の和音内のバランスが難しい。
B中学校	序奏の調性が、吹奏楽ではあまり使われないD durだったため、いい響きを作り出すのが難しかった。 メロディやハーモニーにおいて、楽器同士の音色のブレンドに気を使った。

〔表8〕

(2) 編成上の問題点についてお気付きの点があればお書き下さい。

A中学校	使用打楽器が多かった。小編成としては厳しい。(楽器を運搬する生徒が確保しにくい) マリンバなどせっかく利用するのだから、もっと出番があってもよかった。
B中学校	締太鼓を準備できなかったため、深胴のスネアドラムで代用したが、音色がしっくりこなくて苦勞した。

〔表9〕

(3) 編曲について自由にお書き下さい。

A中学校	生徒の状況に合うように作っていただきありがとうございました。
B中学校	特になし

〔表7〕、〔表8〕及び〔表9〕の自由記述においては、まずハーモニーが難しいとの回答が見られた。先述したように「祭香」セレクションにおけるハーモニーの要素に関しては、繊細な響きの「ゆらぎ」を表現するため機能音声

の理論に縛られない自由な和声の手法を用いており、例えば6th, 7th, 9th等、付加音を用いた和音や、非和声音の処理に現代的な手法を用いている。このようなハーモニーを心地よく響かせるには、和音の構成音のバランスやピッチに対する鋭敏な「耳」の育成と、時間をかけた合奏体としての基礎的なトレーニングが不可欠であるが、時間的な制約等によりそれが十分に実施されていない場合、本楽曲に使用されているハーモニーを難しいと感じられることはやむを得ないであろう。そのことよりはむしろオーケストレーションの問題といえる「相性の悪い楽器の組み合わせ」については改訂を加える必要がある。

また吹奏楽におけるサウンドを色彩感豊かなものとするために、打楽器群を活用することを考慮していたわけであるが、締太鼓のように通常、吹奏楽においては使用されない楽器については慎重に扱うべきであった。ただし本楽曲においては民俗芸能を彷彿とさせる日本的な部分に不可欠であったことを申し添えておきたい。

マリンバは弦楽器群のトレモロのような効果を意図して、一部の箇所を使用したのが、低音の補強、例えばコントラバスのピツィカート奏法の補強等にも使用すれば、より有効に用いることができたかも知れない。

## 5. 考察

今回のアンケート調査から明らかになった、特記すべき点は以下の4点である。

(1) 小編成による演奏は大編成による演奏と比較して、生徒一人ひとりの音や表現が合奏音に表れやすいと考えられる。このことは小編成において長所でもあり、短所でもあるといえる。力量を持った生徒の存在が、演奏全体を印象づけることが可能である反面、経験の浅い生徒の音も覆われることなく聴衆の耳に届く。編曲作品とは異なり、新たに楽曲を作曲する場合は、最初にその楽曲に取り組む学校と生徒の適性を考慮して作曲することが可能であり、ひいては一人ひとりの表現能力を十分に発揮した演

奏が可能となる。

(2) 通常、演奏する楽曲を選ぶ際、演奏可能であるかどうかを検討する要素として、まず技術的側面に意識が偏ることが多いと思われる。しかし演奏において、表現の側面も重要な要素であることはいうまでもない。「祭香」セレクション”では特にハーモニーの表現が難しいと受け取られたようである。取り組むかどうか検討している楽曲が、表現の側面において、指導者や中学生にとって難しいか易しいかの判断の手がかりを、音楽の諸要素ごとにわかりやすく提供する必要があると感じた。

(3) 今回作曲した“「祭香」セレクション”は、これまでの編曲作品を検証した結果を踏まえたものであった。アンケート調査の結果を見ると、本楽曲に託された意図に関しては、適切であったと考えられる。また楽曲の内容についても、小編成での演奏にふさわしいものであるとの声をうかがうことができる。

以前のアンケート調査で〈動物の謝肉祭〉の〈白鳥〉の吹奏楽編曲に関して『もともとチェロ独奏のイメージがあり、オリジナルのものが簡潔で美しく完成されているものだけに（表現が）難しいと思った』（岡田・井上、2006）という回答が寄せられた。原曲の印象が強く支配する楽曲については、吹奏楽で新たな表現を構築するのは難しいものとして指導者に受け取られることが懸念されるという課題に関しては、新たに作曲した楽曲を提供することにより、編曲作品に頼ることなく小編成での吹奏楽活動における演奏楽曲を増やす一助となることができたと考えられる。

(4) 今回の実践においては、本作品が演奏表現の完成度に深く関わることができたと考えている。それはA中学校が全日本吹奏楽連盟主催の吹奏楽コンクールにおいて、小編成部門の県代表として関西大会に出場したことからもうかがえる。楽曲だけにコンクールの好成績の要因を求めるのは些か性急ではあるが、一助となっ

たことは確かであろう。同時に指導者及び生徒の平素の取り組み、すなわちデイリートレーニングが適切に実施されている、ということが背景となつてこそ、本楽曲が活躍の場を得ることになるのはいうまでもない。

## 6. 今後の課題

本研究の今後の課題として、以下の3点を挙げておきたい。

(1) 今回、2校の実践のデータにより分析・考察を行った。今後、実践例を増やし、継続して検証を行い、得られたデータを楽譜の改訂に生かしていきたい。

(2) 提言している選曲の指針により新たに編曲作品を開発する。さらには楽譜のデジタルライブラリ化を進め、小編成で活動する吹奏楽部が演奏楽曲を共有できる環境を整えていきたい。

(3) 小編成吹奏楽の指導・運営等の実践方法に関して何らかの提言を行い、それを指導者同士が共有できる情報ネットワークの構築を模索していきたいと考えている。

### 文献

岡田知也 (2001) 「中学校における小編成の吹奏楽活動に関する研究 - J.S.Bach "無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番イ短調BWV1003" の吹奏楽編曲の試み -」 『研究報告芸術作品集Ⅱ第2号』 香川大学教育学部, pp.10-11

岡田知也 (2004) 「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究 - Villa-Lobos, H "Bachianas Brasileiras No.2" の編曲を通して -」 『研究報告芸術作品集Ⅱ第3集』 香川大学教育学部, pp.11-12

厚生労働省編 (2005) 『厚生労働白書 (平成17年版)』 ぎょうせい, p.392

岡田知也・井上智司 (2006) 「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究 - 編曲の実践と検証 -」 『香川大学教育実践総合研究第12号』 香川大学教育学部, pp.57-58

厚生労働省大臣官房統計情報部 (2008) 『平成19年人口動態統計月報年計 (概数) の概況』, p.4

岡田知也 (2007) 「中学校における小編成の吹奏楽部活動に関する研究 - "「祭香」セレクション" の成立について -」 『研究報告芸術作品集Ⅱ第4号』 香川大学教育学部, pp.11-12

### 注

(1) 『研究報告芸術作品集Ⅱ第3号』において「J.S.Bach "無伴奏ヴァイオリンソナタ"」の吹奏楽編曲による演奏を収録している。

(2) 『研究報告芸術作品集Ⅱ第3号』において「Villa-Lobos, H "Bachianas Brasileiras No.2"」の演奏を収録している。

(3) 『研究報告芸術作品集Ⅱ第4号』において「「祭香」セレクション」の演奏を収録している。なお「「祭香」セレクション」は2004 (平成16) 年5月に作曲され、同年8月に演奏されていたが、研究報告芸術作品集の発行が3年ごとのため、発表年月は2007 (平成19) 年3月となっている。

「祭香」セレクション

"San-ka" Selection

岡田知也

Moderato

Piccolo

Flute

Oboe

Bassoon

Clarinet in D

Clarinet in B $\flat$

Clarinet in B $\natural$

Clarinet in B $\flat$

Bass Clarinet

Alto Sax. 1

Alto Sax. 2

Tenor Sax.

Baritone Sax.

Trumpet in D-1

Trumpet in B $\flat$ -2

Horn in F-1

Horn in E $\flat$ -2

Trombone 1

Trombone 2

Euphonium

Tuba

Contrabass

Timpani

Snare Drum

Glockenspiel

Xylophone

Cymbal  
Hi-hat  
Drum

Tambourine

Triangle

2

Meno mosso, 1/27

Dynamic markings: *p*, *mp*, *fp*

Instrument parts: Picc., Fl., Ob., Bas., B. Cl., B. Cl. 1, B. Cl. 2, B. Cl. 3, B. Cl., A. Sa. 1, A. Sa. 2, T. Sa., B. Sa., B. Trpt. 1, B. Trpt. 2, Trb. 1, Trb. 2, Euph., Tuba, Sn., Cym., Xylo., Gong, Tim.